

ブラジル特報

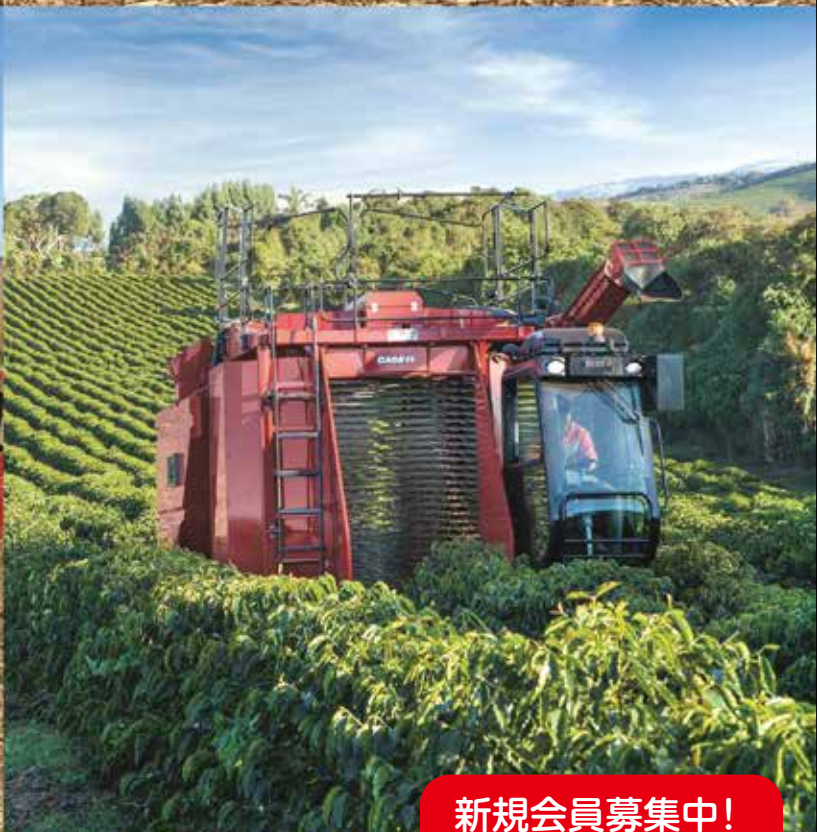


No.1660
2021年1月号

あの町この町
ゴイアニア Goiania

特集 ブラジルの総合的アグリパワー

- ・ブラジル農業の変化・潜在力・試練
- ・ブラジル農業のパワーと今後の展望
- ・農業分野においても女性パワー躍進中
- ・低迷する海面漁業と大躍進中の淡水養殖



新規会員募集中!
詳しくは P21 をご覧ください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁



世界の未来を、ブラジルとつくる。

【Business innovation-1】

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

【Business innovation-2】

貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

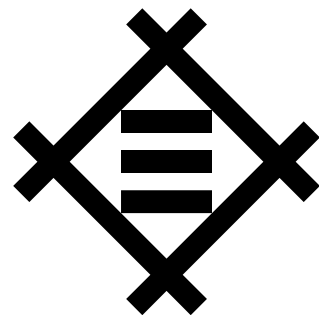
MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

【Business innovation-3】

現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

あの町この町 ゴイアニア [鈴木裕之]	3
ブラジル・ナウ ブラジル地方選挙が示す分断修復への希求 [舩方周一郎]	5
【特集】ブラジルの総合的アグリパワー ブラジル農業の変化・潜在力・試練 [三石誠司]	6
【特集】ブラジルの総合的アグリパワー ブラジル農業のパワーと今後の展望 [幸田祐一郎]	8
【特集】ブラジルの総合的アグリパワー 農業分野においても女性パワー躍進中 [編集部]	10
【特集】ブラジルの総合的アグリパワー 低迷する海面漁業と大躍進中の淡水養殖 [編集部]	11
ブラジル現地報告 コロナ禍のアマゾン観光：バーチャルにしてリアル [島準]	12
連載・日系企業シリーズ 中国語の「漢和塾」がポルトガル語？ [小川善久]	13
連載・ビジネス法務の肝 個人情報保護法の施行 [柏 健吾]	14
連載・税務の動どころ デジタル課税の動向 [エンリケ・パウマ／大村公一／吉田幸司]	15
報告 ポルトガル語文学から広がる多様な世界 [木下真穂]	16
ウーマン・アイ ブラジルに移住して [越知恭子]	17
ジャーナリストの旅路 「コロナ」はブラジルに何をもたらしたのか [山口貴史]	17
連載・文化評論 クラリッセ・リスベクトール生誕100周年 米国でも再評価される実存主義作家 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
キャンパス・コラム 受け継がれるカポエイラのスリット [矢野日向子]	19
新刊書紹介	20
連載・ブラジルあれこれ JOGO DO BICHO	20
協会からのお知らせ	21



写真＝ロベルト・ロドリゲス元農相提供
©ABAG

「表紙のひとこと」

「(時計回り) ①ミナスジェライス州の大豆畑、②サンパウロ州フランカのサトウキビ収穫シーン、③サンパウロ州リベイラン・プレートのコーヒー畑と機械収穫、④マトグロッソ州のトウモロコシ収穫シーン」

ゴイアニア Goiania

ゴイアニアはブラジル中西部の高原に位置するゴイアス州の州都で、人口150万人を擁する都市である。内陸部開発に乗り出したヴァルガス政権時代の1933年に創建され、政治・経済・文化の中心地として発展した。同じゴイアス州の中の連邦直轄区であり、ブラジルの首都でもあるブラジリアがリオからの遷都を決めたのが1956年のクビシェッキ政権時代のことであるから、ゴイアニアはその20年以上前から内陸高原部の開発のために計画的に作られた都市の1つだったのである。首都ブラジリアから南西に210km、バスで3時間程のところに位置しており、1988年まではトカンチンス州もゴイアス州の一部であった。

18世紀前半にブラジルでゴールドラッシュが起き、1720年代にはゴイアス州でも金鉱が発見された。ゴイアニア市のメイン通りはアニャングエラ通りであるが、この名前は金鉱の最初の発見者に由来するとも言われており、サンパウロ・カンピーナス間を繋ぐ高速道路の名前にもなっている。市街地は数個のロータリーを核とする地区からなっており、同心円状の広い街路と並木が美しい近代都市へと変貌してきた。

日系人の数も少なくはなく、私は学生時代、まだ軍政だった1981年から旧南米銀行のゴイアニア支店で銀行研修をさせていただいた。とにかく1年中暑く、「ゴイアニアには3種類の気候がある。quente(暑い)、



mais quente(更に暑い)、そして
quentissimo(最高に暑い)の3つだ、というジョークもあながち笑えないほどであった。15:00の閉店

後、集金を終えた担当者が得意先の農園から野菜や果物をもって行内に戻り、そこで皆で分け合ったりしていた。私も少額の小切手の合計額を計算し、それが合うまで何度も手書きの金額の数字と格闘していた。

週末は行員仲間の親戚の農園に中距離バスで出かけ、乗馬したり家畜の面倒を看たり、夜が明けると搾乳したミルク缶を馬車で隣町まで売りに行く手伝いもした。牛馬の品評会や畜産品展示会などもよく開催されており、初めての経験するブラジルの地方都市やその近隣の豊かなセラーダの規模に目を見張った。とにかく日本では味わえないような人懐っこさ、親戚家族の助け合い、広大な自然や土地や人情に育ててもらったその恩返しとして、現在はブラジルに留学や研修に行く日本の若者達が、同様の体験を味わえるよう支援活動をしている。



鈴木裕之(協会常務理事)



39年間
南米一筋

驚き！
感動！！

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、アメリカン航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、イベリア航空、ブリティッシュ・エアウェイズ、ターキッシュエアラインズ、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、ラタム航空、ニュージーランド航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コバ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル 観光庁長官登録旅行業 第1835号
社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員
(本社) 〒105-0003
東京都港区西新橋1-20-10 西新橋エクセルビル7階
TEL:03-5473-0541 FAX:03-5473-0540

アルファインテル いいね! e-mail: info@alfainter.co.jp ALFAINTER

ブラジル地方選挙が示す分断修復への希求

地方選挙の結果

2020 年 11 月、ブラジルでは市長（副市長）・市議会議員を選ぶ 4 年に 1 度の地方選挙が実施された。ブラジルの地方選挙は 4 年に 1 度開催される大統領選挙・統一選挙の中間に実施されるため、現政権への有権者の中間評価を図る意味合いもある。今年の地方選挙はコロナの感染拡大を考慮して異例の 1 か月の延期で実施されたが、コロナ対応をめぐる中央・地方の対立構図が鮮明となり、例年以上に国政との関連性に注目が集まった。

地方選挙の結果は、大局では 2018 年の大統領選の決選投票で雌雄を決した右派のボルソナロ陣営と、左派の労働者党 (PT) が共に惨敗する形となった。ボルソナロ大統領が支持を示した候補者の大方が敗れたことで、候補者を後方から支援するボルソナロ効果は否定的に働いた可能性が高い。他方で対抗馬だった PT も結成以来はじめて PT 所属の州都市長を失うこととなり、改めて市民の PT 離れが明確となった。こうした中で、ブラジル二大都市の選挙戦のうち、サンパウロ市長選では現職コバス市長が再選した。それに対してオデジャネイロ市長選では、現職クリベアラ市長が敗れ、バエス元市長が当選した。当選した両者に共通するのは、比較的穏健な政治姿勢である。これは、市民の多くが近年のブラジル政治で先鋭化した左右の急進化に憔悴して、政治的分断の修復を望んでいる証左ともいえる。

2022 年大統領選にむけた政界再編の兆し

地方選挙の結果を受け、政局は 2022 年のブラジル大統領選に向けて静かに動きだしている。国政の行方も、政治的分断の修復を手掛かりに見通すことができる。専門誌 Exam/Ideia が地方選挙後に実施した調査では、現状では次期大統領の最有力は現職ボルソナロ大統領となった。ブラジルでは 1997 年の憲法修正で大統領の連続再選が認可されてから、現職大統領が出馬した場合には全員が再選している。ただし、コロナ対応への不満などから大統領の支持率は減少する傾向にあり、今後の動向次第で政権交代は十分にありうる。

現状でボルソナロ大統領と最も競合する候補は、中道左派の民主労働党 (PDT) のシーロである。シーロは、2018 年大統領選挙時も PT 候補に代わる左派候補として期待されたが、PT に取り込まれることを恐れて連立を拒んだ。結果、他の左派勢力も PT が主導権を維持したまま PT との共闘を選ばざるを得ず、決選投票前後に左派勢力は急進化した。ただしこの急進化に多くの市民が危機感を持ち、消去法でボルソナロに投

票した経緯がある。

しかし左派勢力内には、今回のサンパウロ市長選で PSOL (社会主義自由党) 候補のポウロスに期待が集まるという変化があった。ポウロスは、ホームレス労働者運動 (MTST) のメンバーで、2018 年の大統領選にも出馬した人物でもある。コバス市長に敗れたとはいえ PT 以外の左派候補がサンパウロ市長選で 2 位に入ったのは、1985 年の民政移管後初めてである。左派勢力は PT と、その急進的な方向性と距離を置きたい左派政党との間で結束が分裂することで、議会内でも政権が推進する改革に抵抗する力を弱めていた。しかし左派勢力の精神的支柱だったルーラ元大統領に代わる若き候補者への期待が左派勢力を結集する力となり、左派勢力は PDT を中心に、PT を外す形で協調する兆しを生んでいる。

一方の右派勢力も、ボルソナロ陣営を外す形で、中道右派寄りの政党間連立を目指す。特に中道右派の民主党 (DEM) は、コロナ禍でボルソナロ大統領と対決・辞任した元法務・公安相のモーロなどを立候補者に選出する交渉を始めた。

ブラジルの政界は、中道右派のブラジル社会民主党 (PSDB)、中道のブラジル民主運動 (MDB)、左派の PT の主要 3 極を軸に展開してきた。しかし左右勢力の双方で政党同士が主導権争いをすることで、政界再編を促す兆しがある。

コロナとともに幕を開ける新年

新年最初の本誌巻頭言に執筆の依頼を受けたことは、日本でブラジル研究に携わる者として光栄なことである。しかしコロナの感染が依然として猛威を振るう中で、国際社会とボルソナロ政権の行方は不確実性の高い状態にある。それゆえに本誌巻頭言として期待される 2021 年の日伯関係の展望を伝える力が今の自分にはないことに、深い自責の念を抱いている。

昨年は、コロナ禍で日本でもブラジルでも自らの正しさを過度に主張して、異質な他者の言動に怒り、徹底的に懲らしめるまで攻撃する言葉が目立った。しかし、この世界に絶対の正義は存在しない。特にブラジルは、多様な人種・民族を受け入れてきたからこそ、異質な存在や特徴を個性として見なし、異質な他者を許す寛容な社会を形成してきたと学生時代に習った。寛容な社会がブラジルの原風景であるというならば、異質な他者の存在を信じ、待ち、許す力も、ブラジルの人と社会の中に、またブラジルと向きあってきた私たちの中にも残っている。そう私は信じている。

舛方周一郎 (東京外国語大学 講師)

ブラジル農業の 変化・潜在力・試練



三石誠司
(宮城大学教授)

1.はじめに

国際穀物市場で注目されるブラジル産穀物と言えば、まず大豆だが実はトウモロコシも重要である。背景にはブラジルのトウモロコシ生産構造の大きな変化、そして、中国のトウモロコシ需要の急増がある。10年後の世界のトウモロコシ貿易市場はこれまでの米国中心の状況から多極化が進展しそうである。

それが意味する点は3つである。第1は、ブラジル農業の特定品目への集中・依存がこれまで以上に進展する可能性が高いこと、第2に、そのドライバーとしてブラジルの穀物輸出においてトウモロコシのウエイトが高まること、そして、第3に、長年米国産トウモロコシを中心に安定的な輸入を継続してきた日本にも少なからぬ影響があることである。

以下、順次内容を解説する。なお、2020年8月17日、ブラジル政府は今後10年間の同国穀物の生産・消費・輸出見通しを発表したが様式が昨年までと変わっているため、過去の数字については昨年9月20日発表の数字を基本とし、今後については可能な限りで最新数字および一定の試算を加えた数字を使用することとしたい。

2.大豆とトウモロコシに集中する ブラジルの穀物生産

グラフ1は、ブラジル政府による穀物生産量の推移である。ブラジル政府統計における「穀物」とは、綿花、落花生、コメ、エン麦、菜種、ライムギ、インゲン、ひまわり、トウゴマ、トウモロコシ、大豆、小麦、ライ小麦の全てを含み、最新統計では16品目とされている。そのため、米国農務省統計では「穀物」と「油糧種子」に分類される2つを合わせた概

念と理解する必要がある。

一見してわかることは、1980年代には約5千万トンの穀物生産量が、2030年には3.2億トンに達する見込みということだ。半世紀の間に穀物生産量が6倍以上に伸びること、これは世界の食料需給という視点で見た場合、ブラジルの穀物生産が与える影響がそれだけ大きくなるということである。

次にわかることは、ブラジル農業が本格的に拡大し始めたのは1990年代中盤以降ということと、その中心は大豆とトウモロコシであることだ。

とくに大豆の成長が著しい。2020年時点で、既にブラジルは世界最大の大豆生産国であると同時に最大輸出国でもある。世界の大豆生産量は年間約3.6億トンだが、ブラジルはその3分の1を生産している。トウモロコシは現在のところ生産量は米国(3.7億トン)、中国(2.6億トン)、に次ぐ第3位(1.1億トン)である。なお、世界に年間1億トン以上のトウモロコシを生産している国はこの3か国のみである。

言い換えれば、ブラジル農業の驚異的な生産拡大は、大豆とトウモロコシのわずか2品目に依存している…、ということでもある。

3.トウモロコシの生産構造の変化： 子供が成長して親を抜く

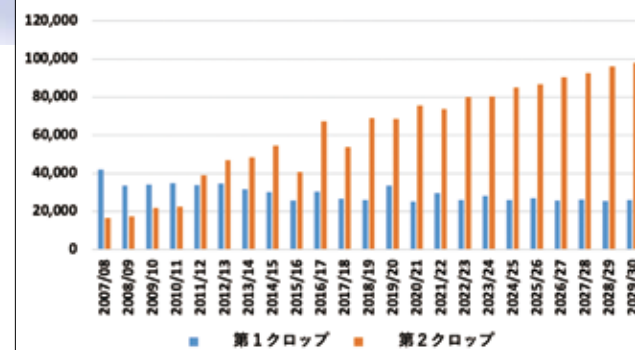
ブラジルの大豆生産が驚異的な成長を遂げていることは各所で伝えられているため、ここではトウモロコシの生産構造の大きな変化を指摘しておく。

国土が広く多様な気候を持つブラジルでは、トウモロコシは年間2回の生産が可能である。北半球の競争相手である米国や中国と季節が逆転し、年間2回の生産が可能なのは、ブラジルのトウモロコシ生産に重要な戦略的意味を与えている。

まず、大豆同様伝統的なトウモロコシ生産地帯は、ブラジル南東部あるいは南部であったが、農地が限られていることや需要が近郊畜産農家・食品関連企業等に限定されていることもあり生産量は限定的である。この伝統的産地による従来型のトウモロコシ生産は、グラフ2の青い線で示した部分である。2000年代前半には約6千万トンのトウモロコシのうち、約4千万トンがこれら地域を中心としていた。

次に、同じグラフ2の赤い線の部分を見て頂きたい。ポルトガル語では「収穫」をサフラ(safra)というがこの部分、かつてはサフリーニャ(safrinha)

【グラフ2】ブラジルのトウモロコシ生産量の内訳推移
(単位：千トン)



と呼ばれていた。ポルトガル語の語尾につけるnha(ニャ)やno(ニョ)は、小さい子供などと呼ぶ時の「〇〇ちゃん」のような意味である。

つまり、クロップ・ローテーションの中では大豆を収穫した後、通常より遅い時期に作付けする第2クロップの小規模なトウモロコシのことである。かつては数量もわずかで補足的であり、サフリーニャと呼ばれていた。実際、筆者が現役の穀物トレーダーであった1980～90年代には、ブラジルのトウモロコシ生産におけるサフリーニャはほぼ無視して良い存在でしかなかった。

ところが、そのサフリーニャが2010年代以降大きく成長し、過去10年で親を上回る量を生産するようになった。もちろん第2クロップの作付け・収穫時期は地域により異なるが、2020年時点では、生産量に関する限り第2クロップの7千5百万トンに対し、第1クロップは約3千万トンと倍以上の差がついている。今やサフリーニャは完全に親を上回りブラジル産トウモロコシの中心となった訳だ。

ブラジル政府の2030年見通しではこの差は一層拡大し、1.2億トンの生産量見通しのうち、1億トン近く(約8割)をかつてのサフリーニャが占め、統計上も今年はサフラとして一括表示されている。

地理的に言えば、生産地は南東部から中央部へ移動している。マツト・グロッソ州、マツト・グロッソ・ド・スル州、ゴイアス州などが中心だが、この傾向はブラジル全土に及んでいる。

もう1点、興味深い点は、この急成長したかつての第2クロップは主として輸出市場をターゲットとしていることだ。ブラジル国内のトウモロコシ需要はそれなりに成長しているが、それ以上に世界市場でのトウモロコシ需要は拡大し

ている。中でも、最大の台風の目が中国である。中国のトウモロコシ需要にいかに対応するか、これがブラジルのトウモロコシ生産と輸出に影響を与える点は大豆と同じ構造である。

4.ブラジル産トウモロコシの ポジションは？

ブラジル政府の2030年見通しでは、大豆の輸出見通しは1億3百万トンに達するのにに対し、トウモロコシは4千4百万トンである。2020年時点での輸出数量は約3千3百万トンのため、今後10年間で1千万トンの輸出拡大が見込まれている。

ところで中国だが、現在、トウモロコシの生産量は2.6億トン、消費量は2.8億トンである。単純計算すればその差2千万トンは繰越在庫と輸入で調整になる。10年後の中国のトウモロコシ生産と消費にはいくつかの試算があるが、簡単に言えば、需要量は3～3.1億トンになると見られている。全て国内生産で対応できれば問題ないが、過去の油糧種子の例を見ても恐らくそうはならないであろう。

小麦やコメは自給を堅持しても飼料作物のトウモロコシは85%程度まで自給率低下を想定しているという研究もある。3億トンの15%は4千5百万トンである。そして、米国農務省の長期見通しでは、米国のトウモロコシ輸出も2030年には現在の約6千万トンから約7千万トンに増加すると見られている。

全体の構図はこうだ。数年前までトウモロコシを自給した中国だが、今後10年ほどで需給差が拡大し、最大4千万トン前後を輸入調達する可能性が高い(2019年輸入7百万トン、2020年見通し1千3百万トンと急

増)。問題は、どこから輸入するかである。とりあえず、米国で1千万トン、そしてブラジルで1千万トンは何とかかなりそうだ。残るウクライナは過去5年間のトウモロコシ輸出数量が2～3千万トンと変動が大きい。現在世界最大のトウモロコシ輸入国はメキシコ(1千7百万トン)と日本(1千6百万トン)だが、そこに4千万トンクラスの中国が参入するという構図である。全てがうまく行けば何とか各国の見通しどおりにはなりそうだが、そこはわからない。

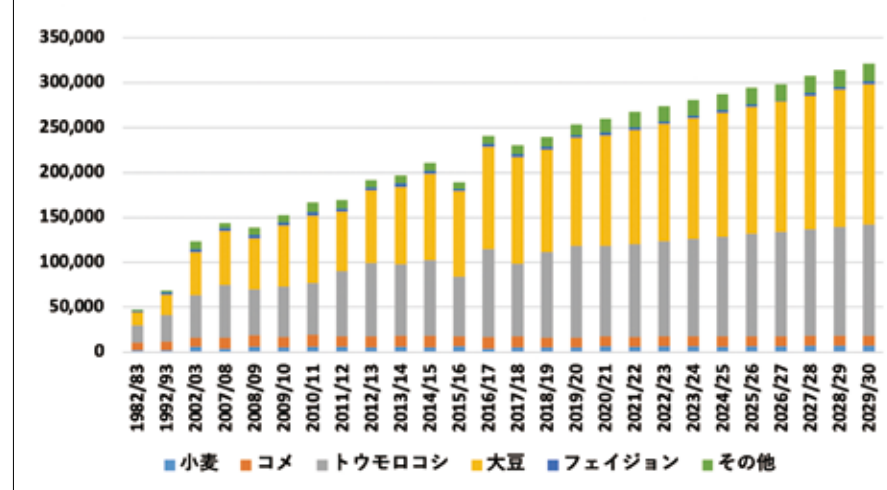
米中貿易戦争の今後は不明だが、「一帯一路」構想を考慮すると、中国のトウモロコシ輸入は、近隣のウクライナ、そしてブラジルなどにシフトする可能性が高い。だが、最後は自国内の生産量、そして国際市場での価格と品質の安定性が影響することになる。世界のトウモロコシ市場におけるブラジルの役割は確実に大きくなることは間違いない。

5.おわりに

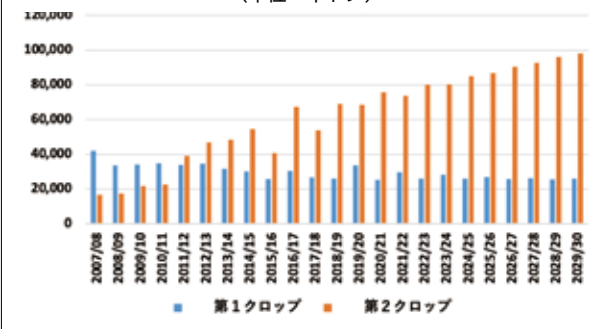
現在、ブラジルの全穀物生産量2.5億トンに占める大豆とトウモロコシの合計は2.2億トンと約9割だが、10年後でも2.8億トンと同水準である。だが、今後は仕向先に占める中国の割合が着実に増加するであろう。

何でもそうだが、一極集中は短期的には強くても逆風に晒された時は苦しい。「大豆・トウモロコシ・中国」の3点セットに依存した成長はどこまで持続できるか、ブラジルの穀物生産・輸出における本当の試練はこれからである。

【グラフ1】ブラジルの穀物生産量推移 (単位：千トン)



【グラフ3】ブラジル大豆とトウモロコシの輸出品推移
(単位：千トン)



ブラジル農業のパワーと今後の展望



幸田祐一郎
(JA 全農サンパウロ駐在員)

好調な農業が経済を下支え

2020 年を象徴する出来事と言えば、やはり新型コロナウイルスの世界的な感染拡大であろう。世界各地ではワクチンの開発も進んでいるものの、完全収束の見込みは未だ立っていない。ブラジルは、人口 100 万人あたりの死亡者数も世界で上位に位置し、連邦政府も感染拡大によって困窮する国民を支援するため多額の対策を打っているが、経済への影響は深刻である。一方で、新型コロナウイルスの感染拡大という危機下においても、国内 GDP の約 1/4 を占める農業部門はプラス成長を続けている。ブラジル地理統計院が発表する四半期ごとの実質 GDP 成長率では、2020 年第 2 四半期(4～6 月、執筆時点で最新の発表)は前年同期比マイナス 11.4%であったが、産業別に見ると、工業がマイナス 12.7%、サービス業がマイナス 11.2%と、それぞれマイナス成長になっているのに対し、農畜産業はプラス 1.2%となっている。工業とサービス業については、新型コロナウイルス感染拡大を受け、各州・各自治体が不要不急の商業活動を規制する政令を長期間継続したことにより生産

活動や商業活動が停滞したことで、前年同期比で大きくマイナスとなった。一方で、農畜産業については、フェイジャオン(食用豆)、コメ、コーヒーをはじめ、生活に必要な農産物の生産量が増加し、国内消費を下支えた。さらに、同発表においては財・サービス輸出もプラスを維持したが、この点においても農畜産物の貢献が大きい。第 2 四半期の大豆、牛肉、砂糖・糖蜜の輸出額は、前年同期比で大豆が 46.2%増、牛肉が 36.6%増、砂糖・糖蜜が 51.7%増と、主要輸出先である中国向けを中心にそれぞれ大きく増加した。このように、新型コロナウイルスの感染拡大という非常時にも、農業部門がブラジル経済を下支えている。

世界最大のポテンシャル

世界有数の農業大国であるブラジルは、国内で生産される農畜産物の中に、世界最大の生産量・輸出量を誇る品目が数多く存在する。コーヒー、砂糖、大豆は、世界最大の生産量および輸出量を誇っており、また、牛肉、鶏肉、とうもろこしなども輸出量で世界上位のシェアを持ち、農業国として各国の国民を養う

上で非常に大きな役目を果たしていると言える。また、今後も世界の人口が増え続ける中で食糧需要を満たすための農地の確保が必要だが、ブラジル国内には放牧地をはじめとする農地へ転

用可能な土地がまだ約 2 億 2,000 万ヘクタール残っているとも言われ、農畜産物の生産量増加のポテンシャルは世界最大である。すでに多くの農畜産品目において世界有数の生産量を誇るブラジルであるが、同国の農畜産物の生産量は今後も堅調に増え続ける見通しであり、世界の食糧供給国としての存在感はますます大きなものになるだろう。その中でも、過去 30 年間で生産量および輸出量が大きく伸び、また、今後も世界シェアを牽引すると見られるのが大豆およびとうもろこしである。世界有数のとうもろこし輸入国であり、また、その他の穀物についても輸入への依存度が高い我が国にとっても、食糧安全保障上、ブラジルは引き続き重要な輸入相手国であり続けることは間違いない。

大豆生産の好調と課題

大豆については、国家食糧供給公社の最新のクロップレポート(執筆時)では、2021 年 1 月以降に収穫される 2020、21 年度産の生産量は過去最大となる 1 億 3,490 万トンと見通されている。ブラジルでは、米国と同じく遺伝子組み換え品種が積極的に導入されており、また、農作業の面でも、近年は IoT や AI、Big Data など最先端技術が導入され、技術支援による生産性向上も見られる。このため、年ごとの生育期の天候には影響されるものの、単収は毎年のように増加傾向にある。また、輸出については、最大の輸出先である中国向けの輸出量は著しく伸び続けている。直近では、主に 2019 年に中国国内で発生したアフリカ豚コレラによる飼料用大豆粕の需要減によって一時的に中国向けの輸出量の減少が見られたものの、その後は需要も回復基調を辿っており、また、米中貿易協議



の行方に不透明感が続く中で、中国向け輸出量は再び堅調に伸び続けている。2019 年の中国向けブラジル産大豆の年間積載量(1 月～12 月)は約 5,700 万トンとなり、2020 年においては 1 月～10 月末までですでに 6,000 万トンを越えている。一方で、輸出されるブラジル産大豆の約 8 割が中国向けであり、中国が輸入する大豆の約 7 割がブラジル産大豆である。お互いに輸出入の大きなシェアを依存していることは、生産面や政治的な環境変化が起こった際に大掛かりな対応を迫られることは、両国にとってリスクとなっていると言える。

とうもろこし生産とエタノール需要の展望

とうもろこしについては、国家食糧供給公社の最新のクロップレポート(執筆時)では、2020/21 年度産の生産量は過去最大となる 1 億 480 万トンと見通されている。大豆と同じく、とうもろこしも遺伝子組み換え品種が積極的に導入され、また、最先端技術や技術支援による生産性向上も見られており、単収は毎年のように増加傾向にある。ブラジル産とうもろこしは、大きく分けて 2 種類存在し、夏作(主に内需向け)と、二毛作として大豆の裏作で作付けされる冬作(主に輸出向け)が存在する。輸出向けとしては、2012 年に米国で発生した干ばつによる米国産とうもろこしの不作および価格高騰をきっかけに、米国産以外のとうもろこしの代表格として我が国をはじめとする世界のとうもろこし需要国から注目されるようになった。以降、とうもろこしの輸出量、そして、特に輸出用として生産される冬作とうもろこしの生産量は増加傾向にあり、冬作とうもろこしの生産量はブラジル産とうもろこし全体の約 3/4 を占めるまでシェアを拡大している。一方で、ブラジル産とうもろこしの新たな需要として注目したいのが、国産エタノール向け需要である。元来、ブラジル国内のエタノール製造には原料としてサトウキビが使用されていた

が、2017 年にとうもろこしを原料とするエタノールの製造が開始され、近年では、とうもろこしを専用原料とするエタノール工場がマトグロッソ州を中心に次々と建設され稼働を始めている。現在では、国産エタノールのうち 10% 程度がとうもろこしを原料として製造されており、今後もエタノールの原料としてのとうもろこしの需要は堅調に伸びていくと予想される。この新たな需要が、今後ブラジル産とうもろこしの価格にどのような影響を与えるのか、世界有数のとうもろこし輸入国である我が国としても注視したい点である。

注目を集めるマトピバ地域

このように、ブラジル産農畜産物の生産量は今後も増加し続け、同時に、国内需要および穀物をはじめとする輸出需要もそれに応じて増加し続けると見込まれている。特に、大豆やとうもろこしについては、国内外の旺盛な需要を賄うための生産量を確保しなければならないが、その中でも、今後、生産量の拡大が期待されるのが「ブラジル産穀物生産拡大の最後のフロンティア」と呼ばれるマトピバ地域(ブラジル北東部のマラニョン州、トカンティンス州、ピアウイ州、バイア州の総称)である。同地域には、開発による生産化農地のポテンシャルは 3,400 万ヘクタール(日本国土の約 90%)もあると言われる。さらに、マトピバ地域には、主要輸出港までのアクセス面においても 1 つの大きな魅力がある。現在、マトピバ地域で生産される輸出向けの大豆・とうもろこしの大部分はブラジル北部のイタキ港まで鉄道またはトラックで輸送される。一方、トカンティンス州中央部から南に向けて走り、最終的にはサントス港に接続する「南北鉄道」の敷設が予定されている。完全開通すれば、マトピバ地域で生産された穀物を鉄道によってサントス港まで輸送することが可能となる。つまり、マトピバ地域からは、将来的には北部のイタキ港、南部のサントス港の両サイドからの穀物

の輸出が可能となり、我が国を含む世界中の穀物需要国へ、より価格競争力のある穀物を、より安定的に供給できるポテンシャルを秘めている。

インフラ事業の進展

なお、マトピバ地域以外でも、ブラジル国内のあらゆる地域で、空港、港、鉄道、高速道路と言ったインフラに関する様々なコンセプション(公共施設等運営権事業)の計画が発表されている。現在でも、ブラジルの内陸輸送手段はトラックのシェアが高く、それ故、輸出向け穀物の内陸から輸出港までの高い輸送費や、不確実なデリバリーによる本船滞船による経費の増嵩が「ブラジルコスト」の一種として幾度も取り上げられてきたが、ボルソナーロ政権が誕生以降は、北部港への主要高速道路である BR-163 の全面舗装が完了するなど、国内の主要なインフラ整備は確実に前進している印象を受ける。現在発表されている各事業についても、入札から工事完了までスムーズに進めることができれば、近い将来にも、ブラジル国内の物流環境は大きく改善する可能性がある。



環境問題への対応

また、ブラジル農業が発展する上で、引き続き無視することができないのが環境問題である。世界最大の面積を誇るアマゾン熱帯雨林を有するブラジルであるが、違法な森林伐採による農地の拡大が後を絶たず、現政権の環境保全に対する姿勢にも欧州などから批判が上がっており、今後も政府の対応策が注目される。ブラジル農業の発展は、森林法や環境法を遵守の下、進められなければならない。

農業分野においても女性パワー躍進中

『ブラジル特報』編集部

農場経営者の女性比率

大きな農場の経営というものは、ブラジルであれ米国であれ、男の仕事、というのが一般的な理解であるが、最近パワーアップしているブラジル農業の場合、どの程度女性が進出しているのだろうか。すなわち、fazendeiro（農場主）に対して fazendeira（女性農場主）がどのくらいいるのだろうか、という疑問が生じたのだが、ちょうどそんなとき、総合週刊誌 VEJA2020年9月16日号に、「Mulheres Em Campo（女性の農業進出）」という3頁記事が掲載されていたので、さらに関連情報をネット検索で調べてみた。

例えば、IBGE（地理統計院）のデータによれば、2003年度の農場経営者のうちの女性比率は13%であったのが、2017年には19%となっている。確実に女性進出が顕在化していることが、この数字で裏付けられている。

大学農学部における女子学生比率

ブラジルにおける農科大学ではトップクラスの Esalq-USP（サンパウロ大学農学部）の事例をみてみよう。1981年度卒業生は、1学年200名のうち女子学生は4名（すなわち2%）でしかなかったのだが、昨年2019年のデータによれば、女子学生の占める割合は、なんと36%であった。過去20年のあいだに、女子学生のシェアは、ほぼ20倍も増加した、というのが最新のファクトである。

アグリビジネス女性連盟

VEJA 誌の記事によれば、農業部門で働く女性が結集する「農業フェミニズム団体」がブラジル全体で20団体も設立されており、その代表例である UMA(União das Mulheres do Agro【直訳：アグリビジネス女性連盟】）はゴイアス州を主体に加盟者数1,000名を誇り、その会長を務めるクリスチア・シュテインメッツは37歳のファゼンデイラである。

名前からドイツ系と思われるが、父方の祖父がリオグランデ・

ド・スールからゴイアスに移住したというから、ガウーショ開拓者の三代目だ。大学は法学部卒だが、農業技術の専門コースを修め、大学院で経営学を修了してから、父親の農場経営を補佐するようになったが、その父親が2014年に急逝（享年60歳）したため、母親、妹と女性三人で Fazenda Boa Vista（ボアヴィスタ農場）を引き継いだ。その農場面積は1千ヘクタール、主に大豆とトウモロコシを植えているが、ヘクタール当たりの収穫量は59袋（3,540kg）から73袋（4,380kg）へと20%以上も生産性向上した由だ。そんな「凄腕」ファゼンデイラも2014年に農場を相続した時、周囲の農業関係者（すなわち男性連中）から、「女だてらにファゼンダ経営をやるうたって、うまくいくはずない」と陰口をたたかれたのだ。

もっとも、ゴイアス州の場合、農場経営に携わっている女性は、現在、全体の41%に達するというから、世界でも先進的だ。

二人の女性農務大臣

こうした農業部門における女性の躍進を象徴するのが、農務大臣に就任した二人の女性だ。

初めての女性農務大臣（任期2015年ー2016年）となったのが、**カチア・アブレウ 現上院議員**だ。大学では心理学を専攻した彼女が、二人の幼子を抱えて25歳で未亡人になった時、亡夫が所有していたゴイアス州北部（現トカンチンス州）の農場経営を引き継ぐ。周囲の反対を押し切って農場に移住して事業を安定化し、農場主として手腕を発揮するや、州の農業経営者連合の会長に選出（1995-2005）され、そこから政治の世界へ入り、下院議員、上院議員を歴任してきている。

もう一人が、**テレザ・クリスチーナ 現農相**だ。彼女は名門ヴィンソーザ連邦大学農学部

を卒業した、筋金入りの農業経営者で、マトグロッソ・ド・スール州の州農務長官を経て2019年から現政権の農務大臣を務めている。鶏肉のアラブ向け輸出問題や中国向け牛肉輸出問題では、（親イスラエル反中国の）イデオロギーばかりが先行して経済外交では全く無能なアラウージョ外相に代わって、関係諸国との交渉を仕切るなど実務派としての実績を積み重ねている。

第5回 CNMA（アグリビジネスウーマン全国大会）

今年（2020年）10月26日から29日までの5日間、「アグリビジネス女性全国大会」が開催された。コロナ感染に対応して今回はオンライン会議となったが、この全国大会は第5回であり、第1回大会は2016年に開催されている。

今年の大会は、30名以上のパネラーが登場（ウェブ出演）し、モデレーターはベテラン TV キャスターのモニカ・ワルドヴォーゲル。まず発言したのは、二人の農務大臣だ。ブラジルの農相テレザ・クリスチーナが口火を切り、その次に発言したのは、ポルトガルの農相マリア・ド・セウ・アントゥネスだった。

いくつものラウンドテーブルで討議されたテーマをアットランダムに列記してみると、「多様性ー農業現場における女性のポジション」、「国際貿易と農産品」、「持続可能な農業を効率化するための機械化」、「Embrapa によるバイオテクノロジー研究最新情勢」、「灌漑農業先進国イスラエル」、「農業におけるジェンダー問題」、「農畜産におけるイノベーション」。

この、五回目の CNMA もブラジル農業における女性パワーを物語っている。

▼テレザ・クリスチーナ
（現農務大臣）



◀カチア・アブレウ
（現上院議員、元農務大臣）



低迷する海面漁業と大躍進中の淡水養殖

『ブラジル特報』編集部

ブラジル漁業の安定的低迷

ブラジルは農業（大豆、トウモロコシ、サトウキビ、コーヒー、オレンジ等）でも畜産（鶏肉、牛肉、豚肉、乳製品等）でも食料大国としての地位を確固たるものにしているが、食料生産分野における唯一の弱点が水産業である。ブラジルは南北に8,500kmも伸びた海岸線を誇る海洋大国であり、獲る漁業は1950年代から80年代にかけてはほぼ順調に伸びて来たが、海面漁獲量は1985年の76万トンとピークとして漸減傾向が続き、1990年43万トン、1995年42万トン、2000年47万トン、2003年48万トン、2009年58万トンというように近年は50万トン前後で推移している。

これは資源量を維持できる最大維持漁獲量を超えた「乱獲」が行われ続けた結果であるが、その端的な例として南部沖で行われてきたイワシ漁をみてみると、1964年の3.9万トンが、73年には22.8万トンとなったが、この時がピークでその後激減し、1982年9.8万トン、87年6万トン、2000～2010年は平均2万トン前後、その後若干回復したが5万トンから7万トンくらいの間で推移してきている。こうした漁獲不振の結果、イワシ缶詰業界は原料の半分以上を輸入に頼らざるを得ない構造になってしまった。また、もう一つの事例としてノルデスチのロブスター漁獲量をみると、1970年代から80年代にかけては年間1万トン前後で推移していたが、2000年代に入ると半減し、最近では5千トン前後となっている。

養殖業（エビ&貝類）

1970年代、日本のクルマエビ導入から始まったエビ養殖事業は20年余り低空飛行状態であったが、品種をエクアドル原産のパナメイに切り替えてから急激に成長する。ノルデスチ各州（特にセアラ州、ピアウイ州、リオグランデ・ド・ノルチ州）におけるエビ養殖は1997年には3万トンを超え、2002年6万トン、2003年9万トンとなり、外貨獲得でも雇用創出でも大きな経済効果をもたら

す一大産業となったが、これまた遺伝障害や病害（白斑病）にやられ、2018年は4.5万トンとピーク時から半減している。ブラジルの海面養殖のほぼ唯一の成功例といえるのが、サンタカタリーナ州沿岸におけるカキとムラサキイガイ（ムール貝）の養殖だ。1990年代から本格化し、現在では、両方合わせると、コンスタントに年間2万トンの生産高となっている。従って、サンパウロのレストランで生ガキを食すのであれば、ほぼ100%サンタカタリーナ産だ。

内水面漁業

アマゾン河、サンフランシスコ河、パラナ河という3つの水系を有するブラジルにおける内水面漁業は古くから行われてきたが、数量的には年間20万～25万トンレベルで推移してきており、淡水魚の漁業も乱獲による資源量の減少が顕在化している。

淡水養殖の本格的展開

こうした低迷する水産業のなかで、近年、ブラジル農業並に成長してきたといえるのが淡水養殖である。サンパウロ州などの山間部におけるニジマス養殖が始まるのは1970年代であるが、量的にも限定的で、ブラジルの淡水養殖が本格化するのには、魚種の選定（フリカ原産のティラピアとアマゾン原産のタンバキが二大養殖魚種）を経て企業的な養殖事業が広がっていく2000年代以降である。1990年代は年間10万トン程度であった養殖生産量は、2009年40万トン、2014年58万トン、2018年72万トン、2019年76万トンとなっており、2018年のデータによれば、ティラピアの占有率は55.4%、タンバキ39.8%となっているからこの二魚種が淡水養殖全体の95%を占めている。



タンバキ▶

ティラピア▶



ティラピアの生産州別順位をみると、①パラナ州、②サンパウロ州、③サンタカタリーナ州、④ミナス州、⑤バイーア州、だ。

ちなみにティラピア養殖の世界順位は、①中国、②インドネシア、③エジプトでブラジルは世界第四位であるが、ここまで成長した背景として、企業的チキン生産のノウハウ（インテグレーション方式、養鶏・飼料生産・加工まで）をティラピア養殖にも適用した事実と国内市場の拡大（輸出は全体の一部）を指摘しておきたい。

こうした淡水養殖業の雇用創出力は直接間接合わせ100万人、淡水養殖用飼料の数量も100万トン以上であり、もはや一大経済セクターに成長したといえよう。もっとわかりやすくいえば、ブラジル人の食べる魚の量は、海の魚よりも養殖淡水魚のほうが多くなった、ということだ。

COPACOL の事例

1963年創設のCOPACOL（コンソラタ農産加工組合）は、組合員数6千人という、パラナ州を代表する大手農畜産（鶏肉・豚肉）農協であるが、ティラピアの養殖と加工に進出したのは2008年で、現在養殖に従事している組合員は206人、加工数量は2015年6,250トン、2019年には14,931トンへと伸びてきている。今年2020年10月には、二つ目の水産加工工場を新設、現在の処理数量2万尾/dayを二年後には8万尾/dayへ引き上げる由で、既存工場と合わせると16万尾/dayの処理能力となる。

2019年度の部門別売上シェアでみると、チキン部門が63%、淡水養殖部門は6.7%となっているが、COPACOL はもはや南米

最大のティラピア加工業者となっている。

ブラジル淡水養殖の伸長を物語る具体例といえよう。

コロナ禍のアマゾン観光：バーチャルにしてリアル



島 準
(ATS 代表取締役)

観光業では、人の移動があって初めて仕事が生まれる。人が動かなくなったコロナ禍のインパクトはあまりに強大だ。我々の仕事はあっという間に蒸発して消えてしまった。あっけに取られ茫然としながらも、売り上げゼロの中で、全く新しい仕事を考え、失敗を重ねた後に、いくばくかの売り上げを得るようになるわけだが、そのあたりの経緯をこの紙面をお借りして記録も兼ねて記させていたきたいと思う。

マナウスのアマゾン観光

私が旅行社を営むマナウスはブラジリアマゾンの観光のメッカだ。といっても、その規模やインフラレベルは、世界の名だたる観光都市に比すればかなり見劣りする。恐らくその理由は、ブラジルの対外的な治安イメージの悪さもさることながら、1967年にマナウスがフリーゾーンとして税制恩典を付与されてからこの方、自らを「工業都市」と定義していることと無関係ではないだろう。ただ、そのお陰？ もあり、アマゾンは今も昔と変わらず、オシャレな観光地とはかけ離れた硬派の観光地だ。広大なアマゾンに暮らす人々は汗臭くてエネルギー（マナウスにはスマートな「表向き工業都市」の顔もあるのだが、ここではそれには触れない）。観光客は癒しの大河、アマゾン河をゆったりクルーズし、エキゾチックな市場を歩き、巨大魚を釣って興奮し、ジャングルを歩いて動物の声に耳を澄ます。誰もが満たされた顔で帰っていく。そんな街から観光客が消えてしまった。

観光ライブ配信の試み



何とかしないと食い詰めてしまう。有り余る時間の中、ネットで出会った日本のバーチャル宿泊サービスの記事にヒントを得て、ツアーのライブ配信にトライすることにした。とは言うものの全く新しいことなのでどこから手を付けたものか見当がつかない。観光施設はコロナ禍で閉鎖中だったが、アマゾン地方都市の生命線である中央市場だけは変わらず営業している。深く考えず、まずは Zoom に繋いだスマホを市場に持ち込むことにした。一人では心もとないで、様々な業種の友人たちにアドバイザーとしてリハーサルに協力してもらうことにした。

リハーサル初日。ベテランのガイドさんが市場を案内する姿をリオ、東京、ニューヨークに住むアドバイザー達に向け、Zoom に繋げたスマホでライブ配信した。皆喜んでくれたが、まだお金を頂くレベルからは程遠いことも強く認識した。まず、参加者がずっと感情移入してくるには導入部分の工夫が必要だった。また通話端末であるスマホを使うため、マイク周辺の音のみ拾ってしまい市場の

喧騒が伝わらず臨場感がない。さらにガイドが多様なお客さんと対面で磨いてきたスキルが、お客さんの顔が見えないカメラの前では全く通用せず、ガイドさんの調子が出ない。

オンライン観光の改善

改善が必要だった。外付けマイク等ハードウェアの見直し以外にもソフトの部分、例えばインパクトのあるスタート地点、ライブツアー専用の周回ルート、各ポイントでの効果的な説明等を修正した。2回目、3回目のリハを経てクオリティは改善したが、肝心のガイドさんの平板な説明口調はどうしても直らなかった。

そんな折、今回のアドバイザーの一人から、自らが教鞭をとる大学でのリモート授業の苦労話を伺った。何でも一方的に話し続けるスタイルだと、学生の集中力維持は30分が限界らしい。まさに僕らが抱えている問題と同じだった。ガイドさんがオンラインで一方的に話し続けるスタイルにお客さんがついてくるのは、そもそも無理があったのだ。

対話形式を採用することにした。私が事務所をスタジオに見立て進行役となり、現場のガイドさんと話しながらツアーを進めるスタイルを綿密に作りこんだ。参加者はチャット機能を使いスタジオと対話し、スタジオはそれをリアルタイムでガイドさんとの会話に反映させる。結果、参加者はガイドさんと一緒に現地を歩いているような気分になれた。実際、参加者のこういうレビューがある。「それ程興味が無かったのに1時間半があっという間で、地球の裏側の市場を歩くのに没頭した。気づいたら日本で、しかも夜だった！」と。ここまで参加者を没頭させるコンテンツが出来るとは、正直想像していなかった。

バーチャルだがリアル

戯言と言われるのを覚悟で、敢えて言わせて頂きたい。これはバーチャル体験という枠にとどまらない、スマホとインターネットを通して自分の目と耳で味わうリアルな実体験だ。

現在、このマナウス市場ウォーキング以外にも、ピンクイルカ見学、アマゾン河合流点見学を不定期で催行している。法人向けの貸し切りライブツアーの需要も少しずつ出始めてきた。しかし毎週多くの参加者を集めていた8月の開始当初と比べ、参加者数は激減している。大手旅行社も力を入れているオンラインツアー市場だが、マーケットは中々成長する様子を見せてくれない。

今後はある程度淘汰が進み、質の高いライブツアーが増え、料金の相場観が定着してくれば、この新たな市場も少しずつでも拡大が見込めるのではないかと、と期待を込めつつ今日も市場を歩き続けている。



中国語の「漢和塾」がポルトガル語？

漢和塾とは

漢和塾って誰？と思う方も多いだろうが、2005年に銀座に誕生した法人向け中国語研修を生業とする語学会社だ。私自身は大学の専攻はポルトガル語、その後、リクルートという会社に入社、まったく畑違いの旅行情報誌の仕事をしていたのだが、



1998年、プライベートで行った中国（北京）がきっかけで中国語を独学で学ぶことになる。その後、退職して2005年に銀座に会社を興し中国語専門の研修会社を営んでいるが、在学中も卒業後もポルトガル語に関わることはなく、ブラジルにも一度も行かず四半世紀以上が過ぎていた。

初めてのブラジル訪問

研修の仕事では「事件は現場で起きている」をモットーに中国の現地には頻りに足を運んでいたが、7年ほど前に、とある大企業の担当者から「貴殿はポルトガル語学科卒業だね？ブラジル赴任の人がいるのでポルトガル語を教えてもらえない？」と聞かれるも、前述のようにポルトガル語は忘れてしまい、更に肝心のブラジルの現場も見ることがない。お仕事自体はお断りするも「そうか、自分はポルトガル語専攻だったんだ！」と思い出し、人生初、単身でまずはブラジルに行ってみることにした。

初めてのブラジルはサンパウロに。ポルトガル語も不安なので、日本人街があると言われるLiberdadeの日系のホテルに宿泊。びっくりしたのは鳥居や日本庭園のある町でなぜか頻りに聞こえてくるのが中国語だったこと。結果的に中華料理屋で中国語を使って過ごしていた。聞いてみると日本人街はいまや「東洋人街」と呼ばれているとのこと、最近になって地元の日系人の方の努力で地下鉄の駅にJapãoの名前がついたが、実態としては、中華圏、韓国系の方が日本の看板で商売をしている。

ポルトガル語研修部門の立ち上げ

その後、ポルトガル語の再学習のためにサンパウロで短期留学をした後、中国語の研修会社である漢和塾内に「BrAsia（ブレイジア）」と言うポルトガル語の研修部門を立ち上げた。Brasil と Asia を引っ掛けた造語だが、ポルトガル語専攻の私が中国に深く関わっていることで、単なる日伯のビジネスのつながりではなく、日本とブラジルのビジネスを中国も意識しな

小川善久
(株)漢和塾代表取締役



がらお手伝いができる、そんな思いを込めたものだ。実際に、貿易額も中伯のほうが日伯を遥かに凌いでしまっていて、日本の企業の応援団としては歯がゆいこともある。が、結果的にはこの7年間で出張ベースではあるがブラジルに13回、中国に15年間で113回もお邪魔してきた中で、ブラジルでの中国の脅威や影響力、或は中国と組んでできることがあるか？など違った視点で、赴任者の方の語学のお世話と情報提供もしている。

そんな私どもも2020年はいわゆる感染症騒ぎでブラジルにも中国にも足を運べていないが、今回の情報戦争ともいえる事件では、世界における中国の存在感が更に増したことは確かだ。米中の狭間で日本のかじ取りはさらに難しいものになるだろう。ブラジルとて同じ課題ではあるが、両政府とも難しい舵取りが今後も必要だろう。

語学研修の環境変化

ちなみにポルトガル語に限らず、語学研修においては、対面授業が一時全面的に中止になったが、実は教育産業にはオンラインは追い風で、これまでなら地方の拠点で優秀な講師を発掘するのに苦労していたが、都市部の優秀な講師が全国的に担当できたりする。また、オンラインソフトに慣れれば、共有ファイルなども活用でき、インターネットで映画など実際の動画を一緒に見ることもできる。また、中国語においては「中国語教育能力検定」なる講師の実力テストを実施、講師品質の客観化に成功しているが、ポルトガル語は講師の力量を図る客観的な指標はまだない。学習者のためのポル検（ポルトガル語検定）や講師の検定試験など、ビジネス、教育業界の有識者の方のお力添えも得て、語学教育の環境整備もしていきたい。

最後になるが、ブラジルは遠い！と言う言い訳はこの先禁句にしよう。ほとんどその距離が変わらない中国・韓国がどれだけ往来しているか？113年前に礎を築いた日系移民の方々の努力の結晶や信用というアドバンテージがあるうちに、日本の経営者・ビジネスマンは、是非ブラジルに足を運んでいただきたい。2021年もういっぺんコロナ禍は、政治的な思惑やワクチン利権にメディアの横暴などで、どこまで収束するかかわからないが、発信源と言われる中国はとくに通常運転で、世界の企業やホテルを買い叩く用意をしている…中国も大いに意識しながら、私も漢和塾の「BrAsia」は語学教育の側面支援ではあるが、日本企業が改めて世界やブラジルで躍進できるよう、タイムリーに現場を知ること含めて引き続き感性を磨いていきたい。



個人情報保護法の施行



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)

2018年8月14日に成立したブラジルの個人情報保護法 (Lei Geral de Proteção de Dados Pessoais, 2018 年法 13709 号。以下「LGPD」という。) がようやく施行されることになった。LGPD の概要は、本誌 2018 年 11 月号 (No.1647) に掲載しているのでそちらを参照いただきたい。本稿では、LGPD 成立から施行までの経緯に触れるとともに、LGPD の現状を踏まえて企業として対応すべきことを解説する。

1.LGPD 成立から施行までの経緯

(1) 施行日をめぐる混乱

LGPD は、2018 年 8 月 14 日に成立し、当初の施行日は法律公布後 18 か月後であった。ところが、監督官庁の設置の遅れや企業の対応の遅れ等を考慮し、2019 年法 13853 号により、施行日は法律公布後 24 か月に延期された。

その後、2020 年に入り、再度施行日の延期が国会で議論され、その中で、LGPD の行政上の制裁 (警告や制裁金など) に関する条文については 2021 年 8 月 1 日から適用されることが決定された。その他の規定についても 2021 年 5 月に施行される内容で議論されていたが、最終的には、2020 年 9 月 18 日に、当初予定 (公布後から 24 か月後) とおり施行されることが決まった。なお、2020 年 9 月 18 日は、2021 年 5 月施行を定めた暫定措置令が却下された (法律化されなかった) 日である。LGPD の条文上は、LGPD 公布後から 24 か月後に施行となっているため、正確な施行日は 2020 年 8 月 16 日となる。

(2) 2019 年法 13853 号による法改正

2019 年法 13853 号は、施行日の変更だけでなく、内容的な改正もいくつか行っている。主なものは、以下のとおりである。

5 条 8 号	データプロテクションオフィサー (以下「DPO」という) が自然人でなくてもよくなった (法人でも可)。また、処理者も DPO を選任することになった
7 条 7 項	一定の条件のもと、公開されている情報を別の目的で利用できるようになった
11 条 4 項	経済的利益を得るためのセンシティブ情報の管理者間の共有に関して、一定の条件のもと、医療サービス、調剤支援及びヘルスケアの提供においては例外的に認められることになった
11 条 5 項	保険会社が契約又は受益者の加入・排除に関するリスクを選別するために健康情報を使用することが禁止されることになった
52 条 7 項	情報漏洩等が発生した場合に、データ主体と管理者間で和解した場合は、LGPD の行政上の制裁が課せられないことになった

2.LGPD の現状

(1) 監督機関

LGPD の 監 督 機 関 と し て、Autoridade Nacional de

Proteção de Dados (以下「ANPD」という) という機関が新たに設立されるが、ANPD の詳細 (構成員の数や任期) は、2020 年 8 月に公布された 2020 年規則 10474 号によりようやく決定した。同年 11 月に初代長官など 5 名の理事が公表されたが、本項執筆時点では、ANPD による具体的な活動はまだない。

(2) 不明確な規定が多い

LGPD は管理者に多くの義務を課しているが、その詳細が決定していないものも多い。たとえば、個人情報の処理記録の保存の要否の基準、情報漏洩等の発生時の ANPD への通知期限、国外移転の要件等である。これらは ANPD が今後決定することになる。

3. 現時点で行うべき対応

上述のとおり、LGPD 上の義務は不明確なものも多いため、企業の対応として何が正解かも現時点では不明確である。ただし、ブラジルではこのような事態 (法律が施行されたが詳細なルールが不明確な事態) は珍しくない。例えば、腐敗防止法 (2013 年法 12846 号) が施行された際も、その詳細なルールは腐敗防止法施行後 1 年以上経って制定された同法施行令 (2015 年施行令 8420 号) により明らかになった。このような事態においては、その時点で適切であろうと考えられる対応をまずは行うこととなる。そして、適切であろう対応は、保有・処理する個人情報の内容によって異なり得る。たとえば、センシティブ情報を取り扱うような場合は、情報漏洩時の影響が大きいため、非常に厳格な対応が必要となる。ただし、いずれの会社においても、以下の作業は最低限行うべきである。

① データマッピング

自社が保有する個人情報の内容や取得経緯を確認し、その上で、その処理について法的根拠があるか否かを確認する。仮に法的根拠がないのであれば処理を停止する。

② プライバシーポリシーの作成

個人情報の処理のためには、データ主体に対して、処理の目的、処理の方法・期間、個人情報の共有の有無、データ主体の権利等の情報を提供する必要がある。実務的には、これらを規定したプライバシーポリシーを作成し、自社サイトにおいて掲載する形で情報提供することが一般的である。また、データ主体から個人情報の処理に関する同意を取得する際には、プライバシーポリシーに同意させるプロセスを作る必要がある。

③ 情報漏洩等発生時の対応プロセスの明確化

個人情報の漏洩や不正アクセス等が発生したときに、被害の拡大を防ぐためや ANPD への報告を速やかに行うための社内対応プロセスを明確にしておく必要がある。特に重要なのが、漏洩等の事実が放置されないために、特定の責任者に情報を集約することである。そのため、社内規程のようなしっかりとしたものを作る余裕がない場合でも、「漏洩等が発生した場合に誰に報告するか」ということを明確にし、社内でも共有しておくことが重要である。

デジタル課税の動向



エンリケ・パウマ
(KPMG サンパウロ事務所
タックスディレクター)



大村公一
(KPMG カンピーナス
事務所マネージャー)



吉田幸司
(KPMG サンパウロ
事務所パートナー)

税源浸食と利益移転 (BEPS) プロジェクトで、いわゆるデジタル経済が議論の中心となっている。これは、このセクターの企業が、その国に存在せずとも国境を超えて事業運営を容易に行い収益を生んでいるという事実に関係しており、テクノロジー業界が生み出すこの収入へのデジタルサービス税 (DST) をめぐる議論は、ますます勢いを増している。

ブラジルでも同様である。税制改革に関する議論に加えて、ビッグテック企業が獲得している収入を対象とした税制改正法案もいくつか存在しており、今回はこの DST のブラジルの動向について簡単に説明したい。なお、以下に説明するように、ブラジルでは、海外でなされている議論とそのまま同じ内容ではなく、ブラジルならではの事情を考慮して検討することが重要となっており、なかなか難しく悩ましいものである。

DST の変遷

ブラジルでは、多くの大規模な多国籍テクノロジー企業が国内に存在しているため、ブラジルで行われる事業から生じる売上と所得は、すでにブラジルで課税されていると言え、この点は他国とは異なると考えられる (例えばヨーロッパでは、企業がヨーロッパのある国に物理的に存在することなく行われた取引から収入を得る場合がある)。つまり、テクノロジー企業がブラジルで事業を行いブラジルで税金を支払っている限り、ブラジルで DST のような税を導入することには、意味がないようにも思われる。

そのため、国のデジタル経済を育成し、ビジネスを促進する環境を作り、新しい企業を誘致し、その結果として雇用を創出し、政府の収入を増やすことを目指して、政府が DST のような新たな税の導入ではなく、他の優先事項に焦点を当てることが期待されている。例えば、これらのテクノロジー企業が予測可能性を高め、現在の税務訴訟数が削減されるメカニズム、などが挙げられる。

テクノロジー業界は急速に発展したため、法律はそれに追いつくことができず、その結果、さまざまなビジネスモデルや顧客が利用できるビジネスチャネル等についての税務上の取扱いにつき様々な議論が生じている。

例えば、ISS と ICMS をめぐる争い、いわゆるデジタル経済の取引にどの税金を適用すべきかについての議論が挙げられる。そもそも 90 年代のソフトウェアライセンスから始まり、以降ずっと続いている ISS と ICMS のどちらを課税するか、という議論であり、現在、デジタル業界には多数の新しい製品 (ストリーミング、オンラインマーケットプレイスなど) が次々と現れており、議論が拡大している傾向にある。(ソフトウェアア

イセンスから生じる所得については、最高裁判決は出ていないが、ISS が課される可能性が高いと噂されている。)

もちろん、90 年代以降ブラジルの法律が変わっていないわけではなく、最近でも、州税、市税ともに改正はされており、それらの課税対象取引が拡大している。

しかし、そのような最近の改正が州と市の間で調整されていないことから、デジタル経済取引が ISS と ICMS の両方の課税対象となる可能性が生まれている。この調整不足は、さらなる不安を煽り、訴訟の増加につながっている。これは、政府が新しい投資家を取り込み国のデジタル経済を発展させようとするのであれば、まさに避けなければならない事態であるがブラジルでは避けられていないのが現状である。

今日、ハイテク企業が直面している数多くの議論を踏まえ、企業の現在の税負担を増やさない、また、DST タイプの税を創設することなく (既存の税を消滅させない限りは)、税制を簡素化し、税務訴訟を減少させるような税制改革が期待されている。

DST 議案

にもかかわらず、より広範な税制改革に加えて、ブラジル議会には、大規模なハイテク企業が提供するデジタルサービスに対する特定の課税制度の導入に関する 2 つの議案が提出されており、1 つは CIDE-Digital, もう 1 つは COFINS-Digital である。

CIDE-Digital は総収入に対して 1% から 5% までの累進税率で課税され、COFINS-Digital は総収入に対して 10.6% で課税される (通常の COFINS が 7.6% であり、3% を加えて合計で 10.6%)。

つまり、このような特定の課税制度の提案は、ブラジル議会が、前述のブラジルの特殊性 (ブラジルでビジネスを行うハイテク企業がすでに物理的にブラジル国内に存在し、税金を支払っているという事実) を考慮せずに、ハイテク企業に特定の課税を導入するという国際的な動きに従ったような税制改正も考えているということである。

この法案が正式に法律となった場合、すでに重い税負担の対象となっている企業は追加の税金に見舞われる可能性があり、法律が業界の成長に貢献するのではなく、新しい投資家がブラジルに拠点を置くことや事業を行うことを思いとどまらせることになりかねない点を危惧するところである。

最後に、現在のブラジルで州税と市税間の調整がなされていない状況を踏まえると会社が新たなデジタル取引を行う場合には、各取引の実態を検討することが非常に重要である。

ポルトガル語文学から広がる 多様な世界



木下真穂
(翻訳家)

2億人を超える話者数を持ち、その数は世界でも6～7番目に多いと言われるポルトガル語ではあるが、いかんせん、日本ではまだまだマイナー言語である。サンバ、ボサノヴァに加えて、シュラスコやエッグ・タルトなどのポルトガル語圏文化はだいたい知られてきた感があるが、この映画や文学になると、日本での知名度はぐっと下がる。

私はポルトガル語の文芸・映画字幕の翻訳をしている。ポルトガル語は80年代末、上智大学で専攻したときに学び始めた。文芸翻訳に漠とした憧れを抱いていたが、当時のポルトガル語界隈の世界は、今よりさらにマイナーだった。まず、文学も映画も日本で紹介されていたのはごくわずか。それでも、せっかくポルトガルに留学したことだし、翻訳をやりたいと事あるごとに口にしていたら、人づてに仕事が時々入るようになった。初めて名前が出た仕事は、マリーザ・モンチのCD歌詞訳だった。

その後も、個人の手紙、論文、TV番組の資料訳、雑誌記事訳、頼まれればなんでもやった。

10年ほど前、ブラジル小説を訳さないかという話が舞い込んだ。一応、トライアルは受けたが、無名の新人にいきなり1冊を任せるなんて「メジャー」言語ではありえないだろう。マイナーゆえ、機会は少ないが、きっかけがあれば段飛ばしで上げられるのだと思った。その後、ブラジルの人気作家、パウロ・コエーリョの作品の翻訳をするオファーをもらい、数冊を担当させてもらった。

2018年にはポルトガル作家のジョゼ・ルイス・ペイショットの『ガルヴェイアスの犬』が新潮社から出版された。これは私が原作にほれ込み、企画を通してもらった作品だ。「ガルヴェイアス」とはポルトガルに実在する小村で、作家本人の故郷である。この村の住民たちの身に降りかかる大小の出来事を、章ごとに主人公を変えて連作短篇形式で描いている。あちらの章で脇役だった人が、こちらの章では主役となり、ページが進むうちに読者は少しずつ人間関係を理解し、やがて「ガルヴェイアス」という村そのものの姿が浮き彫りになってくる(2017年にポルトガル語圏で最大の文学賞の一つであるオセアノス賞を受賞)。

ポルトガルの内陸部にある辺鄙な村だが、作中ではブラジルから来た女性も住んでいる。ガルヴェイアス出身の老女がベロ・オリゾンテで営んでいた娼館に勤めていた彼女は、老女との約束通りに、その死後、遺体を故郷に連れ帰ったまま居ついたのだ。村の田舎者たちから受け

る偏見に苛立つ彼女は、故郷をこう懐かしむ。「向こうは暑さもしっかりと甘く、ここみたいにからからに乾いて焼けた鉄を皮膚に押し付けるようなものじゃない。もっと濃い血が流れた暑さなのだ」。

いっぽうで、村の事情通の郵便配達夫は、人知れず、アフリカのギニア・ビサウに家族がいる。1970年代の独立戦争時にポルトガルから出兵し、現地の女性と恋に落ちたのだ。彼は帰国後も少ない給金をやりくりして年に一度、数週間を家族と過ごすためにアフリカに向かう。

長く続いた植民地主義の残滓が、どんな小さな土地にも、人にも散見されるのがポルトガルであり、それはこの小さなガルヴェイアスとて変わらない。

本書は、2019年に第5回日本翻訳大賞をいただいた。翻訳を対象とする賞ではあるものの、小説の内容も吟味されるのだが、本書に関しては、日本の読者はちょっとした驚きをもって読んだようだ、という印象を私は持った。ポルトガルの小村の日常の細かな描写も新鮮だったようだが、ブラジルやアフリカとの密な繋がりを意外に思ったと言う読者も少なくなかった。

今夏には、アンゴラ作家のジョゼ・エドゥアルド・アグアルーザの『忘却についての一般論』(白水社)を訳出したが、「なぜ、アンゴラの作品を?」と聞かれたことも一度や二度ではない。アフリカにポルトガル語を公用語とする国があるということも日本ではあまり知られていないのだ。本作は1975年のアンゴラ独立から内戦が終結する今世紀初めまでの27年間を、ルアンダの高層マンションの最上階に一人で籠城し、自給自足で生き抜いた女性を軸に、歴史の波にもまれつつも逞しく生きる人々を描いた傑作である。女性はポルトガル生まれで、独立前のアンゴラに移住したという設定で、作中では戦争から逃れてポルトガルやブラジルへと離散していく人々も描かれている。本作も、読んだ人からは、まったく未知のアンゴラの近代史を知ることができた、という感想をよく頂く。

何かのきっかけで、ある国の文化や歴史を知るうちに、思いもかけない方向に枝葉が広がっていくことがある。ポルトガル語を学べば、その守備範囲はヨーロッパからアフリカ、アジア、南米へと大きく広がる。日本とは遠い国々の歴史と人々の暮らしを身近に感じられるのに、映画と文学は有力な手段である。今後も、ポルトガル語圏の世界の奥深さと豊かさを、日本の人々に伝える一端を担えればと願っている。



ブラジルに移住して

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

私は国立岡山看護学院を卒業し、青山学院大学に通いながら、東京の国立癌センター手術室に勤務していた。

その頃、JICA研修員として癌の研修に来ていたブラジル国籍の越知健日系医師と知り合い、1971年に花嫁移住という形でブラジルに移住した。

二人の男子に恵まれ、いずれも主人の背中を見て育ち医者になった。私は、家庭内に日本語環境がなくなりつつあった1986年に、日本語が話せる子供達を育てたいという希望を持ち日本語学校を始めた。外国語としての日本語教育は暗中模索の時代だったから、自分で教材を作り指導しているうちに子供達がどんどん日本語を覚えていき、こんな楽しいお仕事があるだろうかと思えるような毎日だった。

やがて、いろいろな事情から中南米における日本語の学習者が減少していった。その頃、幸運にも第1回汎米研修に参加させて頂くことができ、初めてバイリンガル教育について学んだ。ベレンに帰ってからは、この南米の地に日本語教育を絶やさぬためには、まず、現地の幼稚園を作り日本語を取り入れたバイリンガル教育を行う「日伯学園」の設立しかないと考えるようになった。

そうすることによって、学校経営を豊かにし、薄給の日本語教師の待遇も改善し、後継者を育成することによって日本語教育を継続することができると考えたからだ。

ジャーナリストの旅路

「コロナ」はブラジルに何をもたらしたのか

山口貴史
(TBSサンパウロ通信員)

2020年、「コロナ」に翻弄された年だった。

何か事を進めるごとに、「コロナ」が前に立ちちはだかった。これほど窮屈な年はなかったであろう。

ただ、視点を変えれば、コロナ禍は三者三様であった。

サンパウロの東洋人街リベルダーヂ。多くが店を開けた。地下鉄駅前の老舗日系旅行社や、「文協」前にある日本人におなじみの日本食レストランまでシャッターは閉まったまま。と思えば、コロナ禍のタイミングで大きいスペースに移転を進めるレストランもある。かつてのサンパウロ新聞のそばにあるタイ料理レストランの女主人は、コロナ禍でデリバリーが増え、ホクホク顔だった。そして、もう1店舗オープンさせた。

日系企業も三者三様だ。旅行社を中心にサービス関係は大きな打撃を受けた。友人の旅行社も苦しんでいた。手助けしたくても、旅行・出張ができないので購入できる商品がなく、歯がゆい思いをした。

一方で、日系メーカーに勤める別の友人は、「大きな声では言えないんだけど」、売上は好調だったという。4月のみ業績は落としたものの、そのほかの月は昨年以上の売上を出した。

商売という点とは異なるが、報道関係は、ボルソナロ大統領の珍発言や珍行動、各国のワクチン実験場となり、リオデジャネイロ五輪以来といってもいいほど、ブラジルに注目が集まった年

そして、2007年に「越知日伯学園」を設立した。

当学園の特徴は、日本とブラジルの文化を取り入れた教育を行うことだった。私はその時、パラ州の先人の方々の勤勉さや誠実さから、日系文化が信頼されていることに深く感謝した。なぜなら、入学させてくださる保護者の90%以上が、この学園は日本文化を取り入れた教育が行われているからという理由で入学させて下さっているからだ。

私は学園経営も一つの企業と考えているので、常に今の社会で一番望まれている学園を考えている。女性が社会へ進出するようになって来た今、女性にとって一番大切な問題は子育てだから、初年度から、女性が安心して仕事ができるための一日コース(7:30～18:30)を設置し、教育と職の両方を指導できるようにした。午前中はブラジル教育を行い、午後からは、英語・日本語・スペイン語・音楽・空手・バレエ・和太鼓・フットサル・バスケット・バレエ、更に毎日の宿題と全てが学べる学園とした。

60歳でブラジルの教育学部を卒業し謝辞を述べさせて頂いた時、ある大学教授から「遠い日本から来て、ブラジルの子供達を教育して下さって本当に有難う。」というお言葉を頂いたことが今でも心に残っている。

日伯友好のために微力ながらこれからもお役に立たせて頂きたいと思い、再び教育への情熱が湧いてきた。

だったため、何かと慌ただしい一年だった。

私の小学一年生の娘は、ブラジルの学校に通っている。私は、生徒の父親だけが集うSNSグループ「パパ会」に参加している。参加者は、私以外全員ブラジル人だ。「コロナ」前は、月一でシュハスコパーティをしていたが、それがゼロになった。

この「パパ会」でも、コロナ禍の受け止め方は三者三様だ。

医者のパパは、2020年は忙しい年だった。新型コロナ患者の診察に日々追われた。「サウージ!」。深夜にビールの入ったコップを持って自撮りした写真をグループに送ってきた。

教師のパパは、対面授業からオンライン授業に変わり苦労していた。時々グチをこぼしていた。そんな彼も、週末は自宅でシュハスコをし、こんがり焼けたピカーニャの写真を送ってくる。

苦労している人もいれば、田舎にあるプール付きの別荘を借りて、パソコン片手に仕事をしているパパ達もいる。オフロード車で遊ぶのが趣味のパパ友は、家族を連れて田舎に借りた別荘にこもっている。子供も、ネット環境さえあれば、授業に参加できるので不便はない上、都会より安全という考えだ。

会社に通うサラリーマンパパ達は、家族と過ごす時間が増えて喜んでいる人が多かった。

コロナ禍とはなんだったのだろうか。ブラジルでも、三者三様という事だ。



クラリッセ・リスペクトール生誕100周年 米国でも再評価される実存主義作家

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

米国の若手批評家ベンジャミン・モーゼルによって「カフカ以降のユダヤ系文学者のなかでは最良の作家」と再評価されている作家クラリッセ・リスペクトール（1920-1977）がウクライナで生まれたのは、1920年12月10日であったから、2020年は生誕100周年となる。ブラジル各地（サンパウロ、ポルトアレグレ、レシーフェ等）でリスペクトール文学の現代性を再考する、といった様々なイベント（オンライン）が企画され、また、多くの初出資料を収録した分厚い書簡集が9月に刊行されている。メディア各紙も大きく取り上げているが、筆者が気づいたいくつかのエピソードをメモしておきたい。

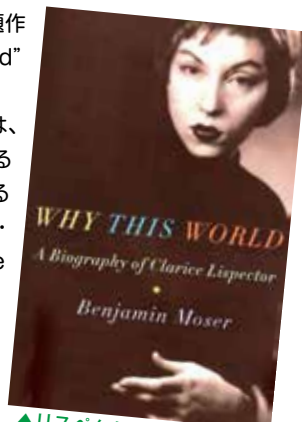
“Why This World”

2009年8月、米国の読書界の話題をさらったのが、若手作家ベンジャミン・モーゼル（1976年生まれ）によるリスペクトール評伝だった。歴史学専攻（学部はブラウン大学、修士・博士はオランダのユトレヒト大学）の研究者でもあるだけに、関連文献の調査・探索は完璧といえるほどで、リスペクトールの親族・友人・関係者へのインタビューもいくつも積み重ね、彼女が生きた時代の背景も押さえたうえで、微に入り細を穿つ叙述となっている。巻末の索引を合わせると648頁と分厚い評伝だが、ストーリー展開が巧みで読者をグイグイと惹き込む文章力は素晴らしい。筆者もポルトガル語版を2010年に入手して読み始めたらあまりにも感動的な内容で、一気呵成に読了してしまったほどだ。

クラリッセが9歳の時、母親が早逝（享年42歳）するのだが、その背景にあるロシア人によるボグロム（彼女はロシア兵に凌辱され、その時うつされた感染病が死因）を歴史家として追究したうえで、クラリッセ文学の特徴である心理主義を読み解いていく。この手法は鮮やかである。

こんな本だから米国の文学関係者が飛びつくのは当然で、出版されると同時に、ニューヨークタイムズの学芸欄にもロサンジェルスタイムズの文化欄にも長文の書評が掲載され、その結果、売行きは急上昇してベストセラー入り（ポルトガル語版と合わせると5万部以上）となった。この話題作のタイトルが、“Why This World”だった。

ちなみにこのユダヤ系作家は、2015年には、彼の編集・翻訳によるリスペクトール選集を出版しているが、2019年に刊行したスーザン・ソントグ評伝（“Sontag: Her Life and Work”）で2020年度ピューリッツァー賞（伝記部門）を受賞しており、米国の読書界では最も注目される作家の一人となっている。



▲リスペクトール評伝：表紙

カエターノ・ヴェローゾも愛読者

9月に日本語訳が刊行された『熱帯の真実』（国安真奈訳、アルテスパブリッシング）はシンガーソングライター作家カエターノの自伝的随想録であるが、随所にリスペクトールへの言及がある。いくつか関連部分を引用すると、「リスペクトールのハイパー・センシビリティ」、「サルトルとリスペクトールに対する敬愛の念」、「僕は59年、彼女の短編『バラのイミテーション』を読んで以来、ずっと彼女を崇拜していた。60年代初めには、彼女が書いた、そして書いていたものはすべて読んでいった。」

1968年頃、友人の俳優から電話番号をおしえてもらった、当時25歳のカエターノ青年は、リスペクトール（当時48歳）と直接電話会話を何回も繰り返したという。直接会ったのは1回だけだったようだ。

ディートリヒ・ヴァージニア・ウルフ？

『百年の孤独』英訳版が刊行された時、著者ガルシア・マルケスをしてスペイン語の原文よりも英語版のほうが「ずっとイイ」といわしめた、名翻訳家グレゴリー・ラバッサは、ブラジル文学作品も多数翻訳しているが、彼のお気に入り作家はと聞かれた時、「クラリッセ・リスペクトールだ。マレーネ・ディートリヒに似ている彼女は、ヴァージニア・ウルフのように書いたのだから。」と答えたとか。リスペクトールの美貌を物語るエピソードとして語り継がれている。



レシーフェの旧ユダヤ人街

レシーフェ市旧市街のボア・ヴィスタ地区。現在は雑然とした商店街となっているが、マルチンス・ジュニオール通りの中ほどに、薬局、軽食堂、雑貨屋などに挟まれて、幅10m奥行き30mの小さなシナゴグ（ユダヤ礼拝堂）がある。20世紀初頭、当時のウクライナやロシアで吹き荒れたボグロム（ユダヤ人迫害・虐殺）から逃れレシーフェに辿り着いたユダヤ人たちが、資金を出し合って、1926年このシナゴグを創設したのである。

クラリッセが5歳から15歳までの10年間（1925-1935）住んだのがレシーフェで、少女時代このシナゴグにも通っていたのだ。リスペクトール一家が住んでいた3階建ての家屋はこのシナゴグから200メートルほどしか離れていないマシエル・ピニエイロ広場に面していたが、彼女の生誕100周年記念事業として、この建物を改築して「クラリッセ・リスペクトール文化センター」を開設しようとのプロジェクトがようやく動き出した由だ。

▲レシーフェのマシエル・ピニエイロ広場にあるリスペクトール彫像

●ボルソナーロがマラニョン州訪問中に問題発言

ボルソナーロ大統領は10月29日、北東部のマラニョン州を訪問した際、飲食店に入店し、同州名物のソフトドリンク（guaraná Jesus。ピンク色をしている）を飲んだ際、「これで自分（ボルソナーロ）もマラニョン州民と同じ『オカマ（boiola）』になった。こんな色をした飲み物を飲めば、オカマになる。そうだろう？」と発言。ディノ・マラニョン州知事（共産党）は、「マラニョン州民に対する侮辱」として、ボルソナーロを名誉棄損で訴えると表明。ボルソナーロは、「冗談だった」と謝罪。（10月30日付ヴァロール・エコノミコ電子版）

●地方選挙結果

11月15日（一次）と29日（決選投票）に行われた地方選挙（市長並びに市会議員選挙）の結果概要は下記の通り。

- 1) 当選市長の数、党別順位 ① MDB(ブラジル民主運動) ② PP(大衆党) ③ PSD(民主社会党) ④ PSDB(ブラジル社会民主党)
- 2) 統治される人口順位では① PSDB: 34百万人 ② MDB: 26百万人となっているが、これはサンパウロ市はじめサンパウロ州の多くの市長がPSDBであったためだ。
- 3) DEM(民主党)は、州都ではリオ、サルヴァドール、クリチーバ、フロリアノポリスを制した
- 4) PDT(民主労働党)は、州都ではフォルタレーザとアラカジュを制した。

5) PT(労働者党)は、はじめて州都の市長ゼロとなった。

●ボルソナーロ支援候補は落選相次ぐ

ボルソナーロがライブ配信を通じて自ら応援した候補者59名の内、当選したのは13名（市長2名、次男カルロスを含む市議会議員11名。カルロスは、再選は果たしたものの、前回に比べ、得票数を3.5万票も減らした）に過ぎず、ボルソナーロ派の期待を大きく下回る結果となった。ボルソナーロが応援したルッソマーノ・サンパウロ市長候補、エンゲレル・ペロオリゾンテ市長候補等は惨敗。当選したボルソナーロ派の市長2名は、何れも地方都市（ミナスジェライス州イパチンガ市及びピアウイ州パルナイーバ市）の市長である。ボルソナーロ派のクリヴェラ・リオデジャネイロ市長とカピタン・ヴァギネル・フォルタレーザ市長候補（PROS）は、決選投票で敗退。マツグロソ州では、地方選挙と同時に上院議員の補選が行われ、ボルソナーロは、PATRIOTAのコロネル・フェルナンダを支持したが、当選したのはPSDのカルロス・ファヴァロであった。

●失業率悪化

IBGE(地理統計院)の全国家庭調査によると、2020年第三四半期の失業率は14.6%となり前期(13.3%)より1.3%も悪化した。特にバイーア、セルジッペ、アラゴアスの三州は20%を超えている。

キャンパス・コラム

受け継がれるカポエイラのスリ

矢戸日向子
(東京農業大学4年)

ブラジルを代表する文化の一つに、カポエイラというものがある。

カポエイラを一言で説明するなら、格闘技・ダンス・音楽を組み合わせたスポーツだ。ブラジルへ連れてこられたアフリカの奴隷が、支配者に立ち向かうためにダンスのように見せかけながら戦いの練習していたことが始まりだと言われている。

私はサンパウロ大学での留学中、ブラジル文化を体験したいと思い、大学内のカポエイラのクラブに参加した。練習日初日、緊張しながらも教室へ入った矢先飛び込んできた光景は、楽器を演奏しながら歌う人々の輪と、その輪の中で妙な動きをしている二人。ユラユラと揺れる手脚、逆立ちから繰り出される蹴り技、空中で崩れる側転……。「これはスポーツ？ ダンス？ 格闘技？」初めてカポエイラを見たときのインパクトは忘れられない。

カポエイラの組手は2人の施術者による心と体の会話・コミュニケーションである。リズムや動きを相手に合わせ、流れるように攻撃と防御を繰り返す。そこにルールや勝敗は存在しない。

「自分の好きなように動けばいい。」先生の言葉がより一層私を混乱させた。実際に輪の中で組手をしてみると、防

御するのに精一杯で攻撃することに気が回らない。リズムを感じるなんてもってのほかだった。一見シンプルにも思えるが、予測力、柔軟性、筋力、そしてリズム感が必要とされる複雑なスポーツなのだ。まるでダンスを踊っているようにも見えた上級者同士の組手は、私が到底真似できるものではなかった。しかし、上級者の相手や輪にいる人々は、笑ったり馬鹿にすることはせず、私のごちない動きにもリズムを合わせようとした。

カポエイラの特徴として、「上級者を敬い、初心者进行いたわる」という精神がある。輪になり、全員でリズムを共にし、声を合わせ、手拍子をそろえる一体感。勝敗を決める他のスポーツとは異なり、人と人との調和を重視するところにその国民性があらわれている。

民族音楽に合わせて繰り出されるトリッキーな技達。不協和音にも感じる融合の背景には、かつてのアフリカ系奴隷達の心情や日々の営み、そして現代に引き継がれてきた社会の規律や秩序があった。練習を重ねるに連れ、カポエイラの深みに呑み込まれていった。

アフリカ系奴隷達が生み出したカポエイラは、現在世界中に広がっている。社会階級や人種に関係なく親しまれている。そこには、信頼や愛に溢れた究極の世界がある。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『年表 移住150年史』 (岡野護編著)

海外日系人協会や海外日系新聞放送協会等で長年に亘って事務局長・理事を務めた著者による海外移住年表。副題が「邦人・日系人・メディアの足跡」となっているが、対象地域は南北アメリカ大陸（米国、ペルー、カナダ、ブラジル、ボリビアほか）ばかりでなくオーストラリアやフィリピンまでカバーしている。地域別移住略史も付された、海外移住と海外日系メディアに関する総合的年表といえる労作。索引も完備しており史料的にも極めて有益。

(風響社 2020年9月 392頁 5,000円＋税)

『今日という日を摘み取れ』 (渋谷敦志写真集)

学生時代、セバスチャン・サルガドのモノクロ写真展で衝撃を受け、サンパウロの二宮法律事務所での留学研修を通じて“ブラジルの”に鍛えられてか

ら、「越境する写真家」を自ら選択したフォトジャーナリストによる最新写真エッセイ集だ。内戦末期のアンゴラ、大震災後の福島、パレスチナ・ヨルダン川西岸、ポスト・アパルトヘイトの南アフリカ、ギリシャ・レスボス島、と不条理にも難民、被災民となった人たちの「隔離の中の生」を記録し続ける。(サウター・ブックス 2020年11月 320頁 2,800円＋税)

『豆の歴史』 (N・モリス著、竹田円訳)

食物繊維もたんぱく質も炭水化物も豊富に含まれている豆。人類に貢献しているのに、その功績をあまり認められていないマメ科植物についての小百科が本書だ。栽培の歴史、文化的背景、豆にまつわる伝承と文学、豆の料理などについて蘊蓄を傾けているが、一般読者も面白がって読めるようなタッチで叙述されている。醤油の解説もあればフェイジョアやアカラジェの情報も大豆の変貌についても解説されており、ブラジル関係者にもお勧めだ。

(原書房 2020年10月 186頁 2,200円＋税)

『アマゾンの料理人』 (太田哲雄著)

イタリア・スペイン・ペルーで料理修行した“地球の料理人”によるアマゾン体験話にして“太田流料理哲学”を語ったエッセイ集だ。ブラジルに隣接したペルー側のアマゾンであるが、「リハビリが必要なほど強烈なアマゾン体験」を繰り返した著者は、「アマゾンの大自然のなかで、正面から食と向き合うことをクリエイティブとを感じる」ようになり、アマゾン原産のカカオを取り込んだ創作料理などあくなきチャレンジを続ける。

(講談社文庫 2020年10月 304頁 650円＋税)

『ラテンアメリカ民話集』 (三原幸久編訳)

本書は『ラテンアメリカの昔話』(岩崎美術社、1972年)を文庫化したもの。ラテンアメリカ各国の民話が37話収録されているが、そのうちの4話、「歌う袋」、「さっかく」、「ジョアン・グルメテ」、「果てなし話」、がブラジル民話だ。類書がほとんどないため貴重な民話集であるが、欧州起源の民話を主体に収録しており、先住民インディオの口承で伝わった豊かな民話群が全く採録されていない。専門家による増補改訂版を切に希望するものだ。

(岩波文庫 2019年12月 340頁 920円＋税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

JOGO DO BICHO

当協会のホームページに伯学コラムというコーナーがあり、ブラジル経験者はじめいろいろな方がブラジルに関するエッセイを寄せているので読まれた方も多いだろう。最近掲載されたいくつかに目を通していたところ、当協会理事の川上直久さんの書かれた「Jogo do Bicho (動物宝くじ) 考」という一文が目にとまった。川上さんは、1973年に滞在していたリオのセントロの街頭でこの宝くじがよく売られていたと回想する。そして、この宝くじの概要を説明した上でこのくじでは25の動物に各々4つの二桁の数字(01～04…97～00)が割り当てられていることについて、そもそも25種類の動物がどのようにして選ばれたのか(なぜ、最後の25番の動物が、アルファベット最後のZで始まり、ブラジルでもみんなが知っているZebraではなく、Vaca(雌牛)なのか)、ブラジルの知人に聞いても疑問は解消しなかったで、誰か教えてほしいと締めくくっている。

川上さんの疑問に答えを見つけるべく調べてみた。

動物の構成は、このくじの生い立ちによるもののようだ。リオのVila Isabelにあった動物園の創設者Barão(男爵)João Batista Viana Drummondが1892年に園の経営不振挽回策として始めた入場券の抽選が始まりだ。入場券には、園にいる動物の中から選ばれた動物の絵が印刷されており、一日の終わりに「本日の動物」が発表されると、この動物が印刷された入場券を持つ当選者には、入場料の20倍の賞金が支払われた。これが庶民に好評を博した。しば

らくすると市中にはこの人気にあやかり一儲けしようという者が現れた。動物宝くじとして売り出されたところ、予想通りの人気となり、瞬間的にリオの街を席巻し、その後ブラジル全域に広がった。

他方、この動きはギャンブルの蔓延を警戒する当局の注目するところとなり、1895年、動物宝くじは、ギャンブルに指定され違法の宣告を受けた。以降、違法状態のままブラジルの人々の間に広く浸透し現在に至っている。

この浸透ぶりを反映して、現在動物宝くじの抽選は、例えば発祥の地であるリオ州では、月曜日から土曜日まで日に4回、日曜日は1回行われている。

かつて、動物くじは、ビシエイロ(Bicheiro)と呼ばれる人々によって街なかのスタンドや新聞雑誌のパンカ、パールやパン屋などで売られていたので、お金と紙片がやり取りされるところを目撃した人も多いだろう。また抽選の結果を記した黒板やボードを見た人もいだろう。どんな小さな田舎町でも見られた典型的なブラジルの街角風景だったが、今では携帯電話やインターネットの普及によって変化しているようだ。ベレンの友人によれば、現在同地では、「街はすれやフェイラ(feira)の片隅の目立たないところで時々見かけるぐらい」らしい。(本稿作成にあたり、宝くじ専門サイト「Doctor Lotto等を参考にした。)(MK)



◀抽選結果風景(ベレン市街はすれ)
写真提供: 鎌田・ローザ

Churrascaria Que Bom!

www.que-bom.com

Produzido pela **ATHLETA®**

LOJA ASAKUSA

TEL: 03-5826-1538

TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI

TEL: 03-6402-5685

TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

日本ブラジル中央協会

イベントのご案内

馬場悠男 国立科学博物館名誉研究員 無料オンライン講演会
演題: 人類700万年史とブラジル

日時: 2021年1月14日(木) 14:00-15:30
開催方式: zoom ウェビナー

アメリカ大陸先史人の起源をめぐる、古くて新しい論争の場となったのがピアウイ州セーハ・ダ・カビバラ遺跡ですが、長年に亘って同遺跡の発掘・研究活動を専門家の立場からサポートされてきたMAIKEN副理事長の馬場悠男先生(国立科学博物館人類研究部長、東京大学大学院教授など歴任)に講演して頂きます。

近田亮平 アジア経済研究所ラテンアメリカ研究グループ長代理 オンライン講演会
演題: ブラジル政治情勢講座"CUT(ブラジル中央統一労働組合)を初めとする労組と労働者党一つの時代の終焉か?"

日時: 2021年1月26日(火) 10:30-12:00
開催方式: zoom ウェビナー

去る11月に行われたブラジルの地方選挙の結果(現大統領支持派も労働者党派も支持率減少)を踏まえ、最新のブラジル政治情勢を分析して頂きます。

林禎二 外務省中南米局長オンライン講演会
演題: 最近のブラジル情勢と日本とブラジルの関係(仮題)

日時: 2021年2月12日(金) 10:30-12:00
開催方式: zoom ウェビナー

日伯関係の最新情勢に焦点を当てつつ、3年目となったボルソナロ政権をめぐるブラジル最新情勢を語って頂きます。

お申し込みは、日本ブラジル中央協会 HP から受付けております。

法人・個人・学生

皆様のご入会を心よりお待ちしております

新規会員募集中

会員数 法人会員 114社
(2020年12月現在) 個人会員 約400名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

- 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
- 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
- 会員交流懇親会へ参加いただけます
- ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます



年会費

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

※入会金は不要です

お申し込み



《日本ブラジル中央協会公式HP》
https://www.nipo-brasil.org

日本ブラジル中央協会 検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。



一盃から
ピースフルネスを



茶道裏千家 HP: www.urasenke.or.jp



裏千家ブラジル出張所 HP: www.chadourasenke.org.br



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

東京コンサルティンググループは、
市場調査・海外法人設立から
現地でのビジネスまで
一貫して海外進出をサポートします。



企業と人を育てる
総合経営コンサルティンググループ



すぐに使える海外実務を大公開！

海外進出の赤本シリーズ

これだけは知っておきたい海外実務の基礎基本から
想定リスクまで丸わかり！



セレモアグループは、シニア世代とそこそご家族の
安心で豊かな暮らしをサポートする企業グループです。

24時間
365日受付

ご相談サポートデスク
☎ 0120-60-1121

資料請求

詳しい資料の他、セレモアのエンディングノート
『私の記録ノート』をお送りいたします。



セレモア 検索

◆品質保証の国際規格 ISO9001 認証(葬祭サービス)
— 人の心 日本文化を守る —



■東京紀尾井町本社 / 東京都千代田区紀尾井町3-12 紀尾井町ビル6F ☎ 03 (3556) 1111 (大代表)
■新宿本社 / 東京都新宿区四谷4-19-7 ☎ 03 (5379) 0111 (大代表)
■立川総本社 ■八王子本社 ■相模原本社 ■埼玉本社 ■所沢本社



担当: 田村 一浩
携帯: 080-2051-6561

どのような事でも
どうぞお気軽に
お申し付けください

「あ!ここにも。あそこにも」私たちの生活は大小さまざまなカタチの鉄に支えられている。それもそのはず。実は地球の重量の約1/3が鉄なのだから。3500年以上前から、この身近な素材を使うことで進化してきた人の暮らし。今だって柔らかな鉄、軽い鉄、小さな鉄…。鉄の可能性は広がり続け、人の暮らしの可能性も広がり続けています。



新日鉄住金は日本製鉄へと社名が変わりました。